

こいむすめむかしはちじょう

恋娘昔八丈

〔解説〕

安永四年（一七七五）江戸外記座初演。松貫四、吉田角丸の合作。

江戸の町で実際に起こった夫殺しの事件を元に、お家騒動を絡ませています。歌舞伎、新内などにも同じ内容の作品があり、改作が多く生まれ「髪結新三」もその一つです。

〔あらすじ〕

萩原家の子息千草之助は吉原の十六夜という遊女に入れあげ、家宝の茶入れをお家乗っ取りを企てる一味に盗まれます。茶入れ探索のために家を出た家老の息子・才三郎の恋人お駒は、実家に戻って意にそわぬ結婚をしますが、夫となった喜蔵が茶入れを盗んだ一味とわかり、取り戻そうとして殺してしまいます。夫殺しの罪人として鈴ヶ森の刑場に引き出されたお駒ですが、処刑寸前、悪事の一味がとらえられ、お駒の赦免状が届きます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください

（一般社団法人 義太夫協会発行）

鈴ヶ森の段

急ぎ行く

人の身の捨てどころとや名にふりし、鈴ヶ森の仕置場所

青竹にて矢来を構へ、あたりにきらめく拔身の鏢、けがれの役人馳せ違ひ、科人今やと待ちかけしは、この世からなる地獄の責め、忌はしくもまた恐ろし。

あはれ見に寄る諸見物、あすこやこゝに立ち集り

「なんとこの科人も、モウ来さうなものぢやなア。おれは牢屋を引き出すとすぐに通町へ駆け抜け、それから河岸へ廻つて以上四度見たが、さて美しい娘ぢや。あれをこつとやるといふは、あつたらものぢやないかいの」

「イヤ／＼なんぼ顔が美しうても心は鬼ぢや。丙午ぢやあるまいし、男を殺すといふことが、どこの国にあるものぢやない」

「オイ／＼／＼さやう一途に云はしやんな。女が男を殺すとはモよく／＼堪忍のならぬわけ。ありや間男。オツトどつこい、ヤ間女房事であらうも知れぬ」

と噂とり／＼口々に

「あんまり待つて寒なつた。白水（さみず）の茶屋で一ばいせう。サア／＼ござれ」

と打ち連れて、皆々かしこへ走りゆく。

子を思ふ闇より闇に目も分かず、たゞさへ暗き父親の手を引く妻ももろともに、涙に見えぬ道筋を、うつゝともなく走るとも、夢路を歩む心地して、やう／＼かしこにたどり着き、見れば厳しき竹垣に、さも恐ろしき拔身の鏢『あれでわが子を殺すか』と思へば氣も消え心消え「わっ」とばかりに泣き出す。

「コレ／＼嬢。こゝがモウ鈴ヶ森か。今のそなたの泣き声は、モウお駒は殺されたか。コレ早う聞かして下され」

と問へば女房が涙声

「イエ／＼まだ娘は来やせぬけれど、モウ厳しい構へを見るにつけ、可愛い娘を殺すかと、思へば胸もはりさく苦しみ。私は身も世もあらぬ」

と嘆けばいと父親は

「才、道理ぢや／＼わいやい。今朝も門を引かれると聞いた時、かけ出て逢ひとう思ふたれど、近所の衆にとめられて、うちで泣いてばかりゐたわいなう。今日が親子一世の別れ、せめて最後の暇乞ひ、また一つには娘めが、云ひたい事もあるならば、聞いて迷ひがはらしてやりたさ。お主のためとは云ひながら、花のやうなる子を殺す、おれが心を推量しや。こんな事知つたら、あらゆる神や仏さま御信心申したら、ちつとは利生もあらうもの、ほかの仏へ願かけたら、雑行ぢやと思し召し、娘を救うて下さるまいと、如来さまばかり念じてゐたのが今ではくやしい。未

来は奈落へ落つるとも娘が命助けたい。どうぞ娘を助けて下され。南無如来さま、南無如来殿。エ、如来め。とサア、かういふがお腹が立てば、どうぞ娘が助かるやう、お慈悲ぢや願ひ上げます」

と愚にかへつたる親心。母はなほさら正体なく

「才三どのが盗まれし、茶入れとやらが出るならば、助かる節もあらうかと、そればかりを樂しみに、今日よ、明日よ、と待つ甲斐も情ない今日の今、死ぬる娘が心のうち、思ひやつていぢらしい。病みわづらひ死んでさへ子を先立てし親の身は、悲しふてならぬもの。蝶よ花よとなで子を科人にして殺すとは、よく／＼前世の因果か」

と狂気の如く身を悶へ夫婦手に手を取り交はし、絶え入り消え入る憂き涙。よその見る目も哀れなり。

跡を追ひ／＼下女、男

「ヤア旦那様。おかみ様。嘆きはお道理さりながら、お怪

我があつてはなほ大事、マア／＼おいで」

と手を引いて、しばらく片方に介抱す。

思ふ事叶はねばこそ憂き事の、恋と義理との諸手綱。不憫やお駒は夫のため、かゝる憂き身の縛り縄。首にかけたる水晶の、数珠の数さへ消えてゆく。屠所の羊の歩みより、はかなき身ぞと観念し、力なく引かれ来る。

代官堤弥藤次お駒に向かひ

「最前屋敷にて、役人中より申し渡されしごとく、仔細あるとは云ひながら、かりにも夫を殺したる科は遁れず。重き刑にも行なはるべきを、お上の御慈悲をもつて死罪に仰せつけらるゝ。ありがたく存じ奉れ」

と云ひ渡せば顔を上げ

「なに事もみな私が心でかゝる身の罪科、露いささかもお上へ対しお恨みはござりませぬ。ありがとう存じます」

と覚悟極めし健気さに不憫と見やる諸役人、涙紛らすばかりなり。

お駒は顔を振りあげて

りなり。

「御見物様、いづれも様、夫を殺す大罪人。さぞ憎いやつ大胆者、いたづら者と皆様の、お憎しみもあるけれど、云ふに云はれぬ訳あつて、夫殺しの科人と、死恥さらす身の因果、不憫とおぼし一遍の、御回向願ひ上げます。世上の娘御様がたは、この駒を見せしめと、親の赦さぬいたづらなど、必ず／＼遊ばすなエ。可愛い夫へ義理立てば、二親に嘆きをかけ、また親々へ従へば、いひ交はした夫へ立たず、はてはかうしたあさましいこの世からなる劍の山、身を切り裂かれ憂き恥を、さらすも定まる因縁づく、約束事と諦めても、二世の契りのその人と、一世と限る二親の、もしや群集のその中に見えはせぬか」

と伸び上がり／＼でも竹垣の透間がくれの人群れに、目も泣きはれて見え分かぬ心を思ひ諸見物、濡れぬ袂はなかり

けり。

群集押し分け二親は、竹垣に取りつき縊り

「コレ／＼お駒や、とゞ様もこの母も親子一世の暇乞ひぢやもの、来ていゝでよいものかいなう、来ていゝでよいものかいなう」

「とゞ様、かゝ様。よう来て下さりました。わしや逢ひたかつた／＼わいな」

「オ、逢ひたいはず道理ぢや／＼、親父殿やこの母より、まだそなたが逢ひとう思やる」

「ア、コレかゝ様。もう云ふて下さんすな。私が死んだ後にてても、かのお人がこゝへ来て、あさましい形を見やしやんしたら、ひよつと愛想が尽きやうかと、わしやそればかりが悲しい」

と今死ぬる身の今までも、おほこ娘のあどなさを、思ひやりつゝ二親は、前後正体打ち倒れ、せき上げ／＼叫び泣き、

音は浜辺に打ち寄せる、浪に浪増す涙なり。

『果てしはあらし』と下部ども

「時刻移る」

と引ち立つる。二人の親は竹垣に、隔てられたる親子の別れ、見物群集は口々に宗旨々々の手向草、

折もこそあれ才三郎。丈八に繩をかけ、群集押し分け矢来のうち

「御預けの茶入れの盜賊喜蔵に紛れなき由、この丈八が白状ゆゑ再び茶入れもわが手に入る。また喜蔵、丈八兩人はこの才三郎が親の敵。お上へ委細申し上げ、お駒が命赦免の状、御披見あれ」

と差し出せば弥藤次取つて押しひらき

「成程々々紛れなき赦しの趣き。親の敵とあるからは喜蔵丈八兩人は才三郎の心任せ。お駒はすぐに二親へ、御赦免なるぞ」

とありければ『はっ』とばかりに庄兵衛夫婦。夢に夢見し心地して、よろこび涙ぞ道理なり。

お駒が縄目とくく〜と解けて結びし恋娘。千代も変はらぬ御恵み、重ねく〜て黄八丈。昔語りぞ今ここに、伝へく〜し筆の跡。世々にその名を残しける。